後輩の素晴らしい講義

ＳＴ養成校の集中講義の一コマを、意思伝達装置の工夫について、後輩の指導員にお願いした。彼女は、ＡＬＳ、筋ジスの方々への日頃の取り組みをスライドを使い、詳しく学生に紹介してくれた。私には、素敵な講義に思えた。

それは、彼女が何を想い、何を大事にし、何をしているのかを実に解り易く実践を通して触れていたからである。常に対象者の願いを優先する取り組み（ex.進行する症状から、他のスウッチが機能的と思っても、最後までキーボードを指で打ちたいという願いへの工夫）、対象者の進行する症状につき合う係わり合い方（ex.症状進行に伴い、次々とその症状に合わせてのスウッチや補助具の工夫）、自ら「職業病」と謙遜する取り組む姿勢（症状進行のスピードに既製のものでは間に合わないので身の回りのものを活用しての工夫（バスマットを切り張りしての工夫、等々）、ウンイドー・ショッピング時も目は工夫に役立つものをいつの間にか探している自分、秋葉原までもスウッチ類を探しに新幹線に乗ってる自分）、等々。

学生には、夜遅くまでカセットケース等をナイフで削り、ハンダつけをしてスウッチを作る彼女の姿を想像しながら聴講ように前もって話しておいた。意思伝達装置の工夫の具体的なことはもちろんのこと、何よりもこうした彼女の姿勢から、ＳＴとしての大事なことを学んで欲しくて彼女に講義を依頼した私の目的は、学生に伝わったようである。

私は機会ある毎に、プロとは対象につき合い切る姿勢であり、自分の日常生活の中でもプロへの思考を持ち続けることであり、その姿勢が対象者の信頼を得ると話してきた。そのことが、後輩に伝わり取り組みの中でも具現化していることを知ったことが、何よりもうれしかった。彼女は「阿部さんの話は、現場で取り組む自分達には凄く実感でき、参考になる話。それだけに、学生も今は理解できなくても、就職して現場で悩んだ時に、阿部さんの講義の話を思い出し、初めて理解できるかも」と励ましてくれた。

聴講した学生の感想文の中に「○○さんの取り組みを、ぜひＨＰに！」、また「○○さんの姿勢に感動した！」というものもあった。もちろん、感想文は、彼女に届けたい。

（2002 年 12 月 08 日 記）